

5年目を迎えた福島へ

2015年4月1日～4月3日

狛江の放射能を測る会 二階堂 まり

2012年の4月から毎年4月の初めに福島に来て4回目となる。この間、被災地の様子はほとんど手つかずのまま残されていた1年目の状態から、帰還困難区域を除き除染と延々と続くフレコンバックのまちに変貌していた。2012年の4月には役場を再開した広野町も元の住民は半数しか戻らず、除染と原発の廃炉作業に従事する労働者の町になっていた。居住制限区域にあたる富岡町や飯館村では除染してあとでも1時間当たり1マイクロシーベルトを超えるところが何カ所もある。住民の帰還以外考えていないかのような政府の対応が目立つ中で、避難者・被災者の苦悩が深まっている。

〔1〕 浜通り医療生協 にて ＜営業損害賠償の打ち切り＞

政府と東電は、避難指示解除後一年で支払いを打ち切るという方針で、2014年12月には営業損害賠償を2016年2月で打ち切ると発表した。つまり事業所などで売り上げが下がったところを賠償していたものを打ち切るということだ。これは、県民を挙げて大きな反対運動となり、政府・東電に見直しを表明させたそう。次々「終わり」にする意図だろう。

＜中間貯蔵施設建設の受け入れ＞

43の市町村の除染などから出た放射線廃棄物を第一原発のある双葉町と大熊町に集めて30年間保管する作業がスタートした。「出来てしまえば何を持ち込んでくるかもわからない。30年後に県外に運び出すというのが信じられない」・・・ということで、地権者の内、同意したのは1名のみだそう。国は、買い上げるのは難しいし、借りれば「返せ」と言われたら困るので、国の「地上権」を設定して継続できるようにしているそう。

＜楢葉町の状況ほか＞

楢葉町は今年の7月上旬に避難解除されるように準備が進んでおり、他と比べて帰りたいと言っている人が多い。理由は、比較的放射線量が低い・役場前に仮設商店街ができていて・コンビニが2軒ある・電車が開通している・・・など。もちろん帰りそうなのは主



浜通り医療生協の工藤史雄さん(中央)から、営業損害賠償の打ち切りに県民あがての反対運動で撤回させたことや原発事故の深刻さが今も続いていることなど4年経っての現状などについて聞いた。



いまはフレコンバックが山積みの楢葉町。帰還希望者は8%、条件が整えば戻る32%。60歳以上がほとんど。これで復興になるのか。

にお年寄りだが・・・。このように店などが準備されているのは原発労働者が多いせいだ。更に、帰還の期限を決めて「それまでに帰れば1500万円+α出すがその後は出さない」と早く決断するように圧力をかけられてもいる。ただし、除染は終わったがとても長い間放って置かれたために住むことができずに解体をしないければならない家が1000軒ほどあり、その順番待ちが約1年！さらに新しい家を建ててもらうのに2年待ちだという。町には「分譲中」の立て看板もでている。

全住民避難で役場を移転せざるを得なかった9町村の内、戻ったのは川内村と広野町だけだが2年たってもいずれも住民の3~4割程度のみで若い世代はほとんど戻っていない、第1原発がある双葉町と大熊町では2014年6月のアンケートに「現時点で戻らないと決めている」と答えた人がそれぞれ67%と65%に急増している。

<甲状腺検査>

一巡目は2013年までで3.11当時の18歳未満37万人が対象で、受診率は約70%だった。去年から始まった2巡目は3.11後の1年間に生まれた子どもを加えた38万5千人が対象だがまだ受診者は81,621人とかなり低率。目をつぶりたいのだろうか？1巡目では110人が癌やその疑いと判定され、その内86人が癌と確定。2巡目では8人が癌やその疑いで、1人が手術。原発との因果関係は今でははっきりわからないし、この先どうなるかもわからないがそれだからこそ、5年、10年と続けて受信していかないといけないのだ。また、エコー検査の技師やデータを読める医師の育成が必要である。

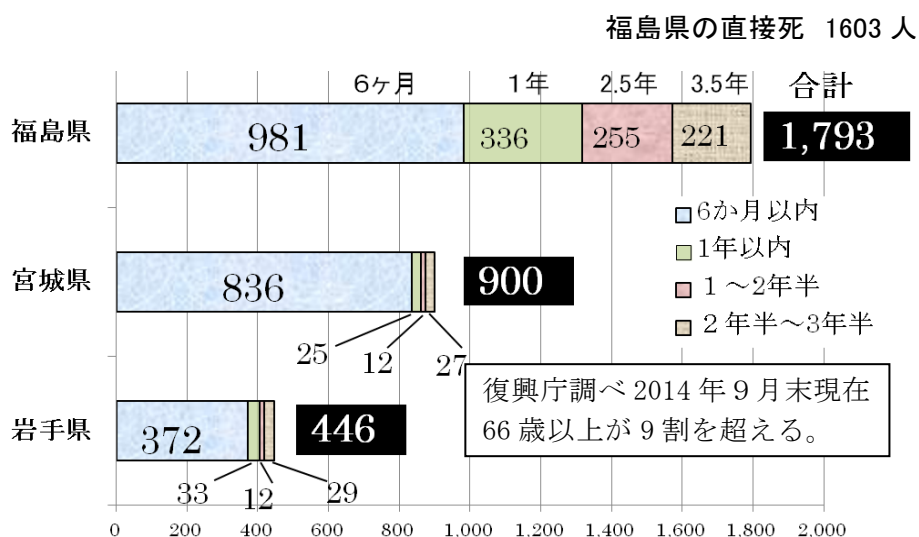
<現地の状況と裁判>

人が住んでいない強制避難区域の面積は約1,000平方kmで、東京都の面積の約半分だ。避難者の数は減少したといっても119,000人でその大多数は家族そろって住む家も展望もない過酷な避難生活を送っており7割が心身に不調を訴えている。震災関連死は3月29日現在1886人（直接死は1603人）で原発が原因の自殺は63人、孤独死は34人と言われているがその多くが原発関連死だと思うとのことだった。自殺は、厳しい警察の認定で自殺とされた数なので実際にはもっと多いだろう。

「原発事故被害いわき訴訟」の原告の内、22人は3.11後に生まれた子どもたちで、これがこの裁判の特異なところだ。医療生協の工藤主任も「次女は震災後に生まれ、生まれた時から低線量被ばくをし、劣悪な環境の中で育った被害者だ。彼女たちを未来にわたって救う政策を行ってほしい」と話された。

「原発の被害は、各地域で自分たちの被害を自分たちで計算し訴えよう！」との言葉にハッとした。例えば、茨城県の農家は、「福島は補償がもらえて羨ましい」と言っているだけでなく、野菜が売れないなら訴えよう。そうやってみんながこの原発事故でどんな被害を受けたかを考え計算して訴えればこの事故の全体

死亡時期別の震災関連死者数



像が見えてくる。そして、こんなに大被害が出てこんなに大金が請求されとなればそれで原発が止まる！と。東京の我々だって被害を受けているのだ。

<いわき市特有の問題>

1年目に訪れた時から言われていた問題だが、避難者へのバッシングは以前より表立っては出なくなっただけで、隠された状態で「潜在」している。避難者が増える→有資格者（ヘルパー・看護師・保母さん・・・）が不足。看護師が足りず閉鎖になった医療病棟もある！勿論相変わらず補償金の問題の不満もある（いわき一般市民0円、津波被害者300万円、原発被害者月に10万+家を売ればたくさん入るなど）。工藤氏が見た例として、病院でおじいちゃんが受診後に受給者手帳を出していなかった。出せば無料になるのだが、1割払うから手帳は出たくないと言っていたそうだ。当然の権利なのに周りの目を気にしてしまうのだ。又、去年の地価上昇率の上位10位までがいわき市にある。今、建築ラッシュである。地価は上がっても報酬を上げるわけにはいかない。

<どんな支援を求めますか？>

医者に来てほしいとか言っても無理だし、いまさら毛布でもないし・・・一言でいえば「福島を忘れないで！」なのだ。どうやって？→お米を送ってくる人もいる。もちろんその量で何ができるというものでもないが、「少ないけれど、これで、‘私は覚えていますよ’という表示なのです」と。「忘れさせよう」としている人たちがいる。「オリンピックに邁進させよう」という人たちがいる。それに負けてはいられない。「一度行ってみようよ」でもいい。福島に来てみればそのあと（福島に向かって）アンテナが立つだろう。

【2】いわき放射能市民測定室 たらちね にて

いわき市の主婦たちが中心になって立ち上げたこのNPOは、子どもの甲状腺検査や、持ち込まれた食材や土のセシウム測定をしてきたが、「β線放射能測定ラボ」を立ち上げつつある。今各地で測定がおこなわれているのはセシウム134（半減期2年）と137（半減期30年）であり、γ線による放射線量である。β線は、測定に莫大な設備投資と技術が必要でほとんど行われていない。β線は飛距離が短いため、主に体内に取り込まれた時の被ばくが問題になる。例えばβ線のストロンチウムはカルシウムの成分と似ているので、体内に入ると骨に取り込まれてしまい、延々と体内で放射線を出し続け細胞を傷つけて癌化させる恐ろしい放射線だ。たらちねでは人々の支持と理解でなんとかラボを立ち上げ、4月中の測定開始に向けて全力で準備を進めている。

「たらちね」のことは朝日新聞「プロメテウスの罠」でちょうど連載で取り上げられている（5月15日～6月3日）。

【3】いわき市中央台仮設住宅と帰還の現状

2012年4月に訪れた仮設住宅がどうなっているのか行ってみた。元々、住宅を分譲するために整備されていた広い敷地がそっくり仮設住宅に使われたものだ。3年前



鈴木薫事務局長(写真中央)からベータ線測定の説明を受けた。高価で維持も大変だが、「必要なことですから」とこともなげに答える



ベータ線核種測定装置。前処理が複雑で灰化装置、遠心分離機、マイクロ波装置を駆使する。専属の技術員を2名配置。

に訪れた時は、比較的短期間の避難になると思われた
広野町のプレハブと、長丁場になりそうな檜葉町の木
造、そしてごく少々建てられていた「お金のある人」
の新築家屋の三種類の住宅があり、みてくれの「格差」
がとても気になった。今回行ってみると、あの時は「結
構いい感じ」に見えた木造は3年以上を経てとてもみ
すばらしくなっていて悲しく見えた。プレハブの広野
町の仮設は、帰郷した人や復興公営住宅に移った人が
多く、ほとんどが空き家で夕暮れ時にポツリと明りの
ついている家を見るととても心が痛んだ。公営住宅は
家賃が自己負担であり（経済状況に準拠はするが）、
一人暮らしには入りにくく、経済的、身体的、社会的
に恵まれない人には入居が難しく、結局はお年寄りが
「終の棲家」として仮設に残っているとのこと。孤独
死・自死が減らないという話が説得力を持ち、弱者が
切り捨てられていく現実を目のあたりにして言葉を
失った。事故から4年、子どもたちの変化は甚だしい
が、一方お年寄りたちの変化も甚だしいのだと思った。
年とってからの4年、しかも生きがいや大切な人を失って今までとは比べ物にならない狭く不自由
な名ばかりの家での4年間は、どんなに大きな「加齢」だったことだろう。取り戻すことはできな
い・・・。

檜葉町は「長期の宿泊がまもなく認められる」段階であり、広野町は「戻れ戻れ！」の勢いに抗え
ずに戻る人が増えている状態だそうだ。広野は人口5000～6000人の内約半数が戻り、それに作業
員がいるのでほぼ元の規模になっている。しかし母親たちは「そういう町には戻りたくない」とも・・。

「くんちえ」という前回も買物をした小さななんでも屋さん
に寄って店の女性と話した。実家がいわき市の湯本で、檜葉
町から避難してきている。檜葉はまもなく帰郷をスタートさ
せる方針だが、「最終的には帰りたいけど・・・。（今は店とか
ある程度あるんですよね？）でも、見かけるのはほとんど原
発・除染労働者ばかりですよ。水道のインフラがまだだし、
家も使えず壊さなければならぬけど順番待ちだし・・・」

いわき市では海の近くの下神白（しもかじろ）に細い道を
挟んで復興公営住宅と災害公営住宅が200戸ずつ建てられ
ている。復興公営住宅は県営で原発被害者対象であり、
町ごとに4棟建っていた。災害公営住宅の方はいわき市
営で津波の被災者対象。まだ建設中だったが、鉄筋建て
5棟、二階家、平屋、集会所ができるようだ。他町から
来た人たちが周辺の住民をうまくコミュニケーション
をとって溶け合っていけるかが最大の懸案だ。医療生協
のところでも書いたが、住民票を移していない避難民に
たいするいわき市民の感情は燻った（くすぶった）まま



いわき市中央台の広野町仮設住宅



いわき市中央台の檜葉町仮設住宅



県営復興公営住宅

市営災害
公営住宅



市営災害公営住宅模型図

いわき市下神白地区に建てられる県と市の住宅

でもあり、「町のお祭り」に寄付してくれるのだろうか・地域の清掃は一緒にやってくれるのだろうか？などなど日常の些細な気がかりがたくさんある。

<ふたば未来学園>

中高一貫校として「双葉未来学園高」が仮校舎となる広野中学で4月8日にスタート。国際感覚が身につく、素晴らしい教育環境を備えた学校として120人を募集したが、それを超える応募があり、152人でスタートする。本校舎は山を削って海側に土盛りをする。「ふたばの教育復興応援団」と連携して授業などを行う。応援団には、小泉新次郎復興政務官、平田オリザ、山崎直子宇宙飛行士、西田敏行、安藤忠雄、和合亮一なども名を連ねる。ただ、帰還へのためらいのある人たち、他の判断をしようとする人たちへの大きなプレッシャーとなっている。広野町は「復興の先端」にいる。そして「帰還が大前提」で進んでいる……

[4] ザ・ピープル / 小名浜地区復興支援ボランティアセンターにて

ボランティアセンター訪問も4回目だが、事務所の場所がまた変わった。「震災から4年もたったのにまだボランティアセンター（以下ボラセン）が必要なの??」と言われることもあって場所を安く借りるのも大変だ。「必要だ」ということは内部の人間はよくわかっているが、外部の人は認識が違う。ザ・ピープルは震災前から古着のリサイクルをしていて震災でそれがとても役に立ったNPOだ。その流れで理事長の吉田恵美子さんがボラセンの長も兼ねている。リスポというショッピングセンター内に避難者の交流サロンも持っている。

仮設の項で触れた市民と避難者の関係の問題ではボラセンへの期待が大きく、市が作った「コミュニティ交流員制度」も、吉田さんが中心になっている「みんなく（みんなが復興の主役、約50団体が参加）」が引き受けている。交流員を募集し指導し育て、コミュニティに「つなぎ」として入ってもらおう。

<オーガニックコットン>

被災者の若者の中には、仕事が無くてもとりあえず食っていけるため非就労が出てきている。するといわき市の若者でも「俺だって働きたくないのに・・・」と働かなくなってしまう者が出てくる。彼らに就労訓練をするために「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」に参加させている。このプロジェクトはコットン栽培が風土に合っていることと放射能を吸収しにくいことなどでスタートし、3年目の収穫を終えた。とても収穫量が伸びた去年と比べ不作だったが、いわき市の外にも広がり、県外からもコットンの種を撒いて育てて送ってくれる支援者や農作業をしに来るボランティアも多くおり、繋がりが大きくなってきている。獲れたコットンでコットンベイク（人形）・手ぬ



吉田恵美子さん(右から3人目)はNPO法人ザ・ピープルの代表。活動的でとても明るい。いわき市の土地柄を生かして復興を支援するコットンプロジェクトをはじめ、市民と原発事故避難者、津波被災者を結ぶ「コミュニティ交流員制度」も担う。



コットン栽培は3年経ち、いわきに定住して、野菜とコットンを栽培して再起を計るという双葉町の農業者も現れた。写真は富岡町からの避難者が月1回集って栽培を行う「みんなの畑」の第1回目（吉田恵美子さん提供）

ぐい・Tシャツ・ハンカチなどを作っている。更に、初めは仮設にいる元農業従業者がプランターでコットンの「農業」をやり楽しんでくれていたのだが、ついに、いわきに定住して、野菜とコットンを栽培して再起を計るという農業者ができたそうだ！双葉からの方だ。コットンの事業は、コミュニティ交流員とも手を携えて、復興公営住宅の人にも働きかけ、助けてもらう計画だそうだ。

<いわきおてんとSUN企業組合>

震災前からいわき市を拠点にNPOや地域づくり活動をしてきた6名が中心となり、独自の復興活動を行いながら思いやビジョンを共有して活動している。吉田さんは代表理事！とにかくこの方の行動力、創造力、エネルギー、素敵な笑顔・・・ハンパない！脱帽です！！

上記のオーガニックコットンの他に少しずつ太陽光発電をしたり、自然エネルギー普及活動などをしてしている。

<水俣に学ぶ>

2014年も8月18～23日まで三度目になる「いわき中高生水俣研修」を実施した。「水俣に学び、いわきの未来を創るプロジェクト」で、15名の中高生が参加した。主催はザ・ピープル。熊本県水俣市はコミュニティ崩壊の危機に直面したがそれを乗り越えてきた。「いわき市特有の様々な問題を克服して前に進む」ために若者が水俣に学びに行く。彼らは目覚ましい成長をして帰ってくるそうだ。未来のリーダーになってくれることだろう。

[5] ふくしま共同診療所

福島駅から近いビルの一階のこじんまりとした診療所だが入るとすぐに畳の一角がありピンクや明るい色が柔らかな雰囲気を作る中に人形やおもちゃ、そして絵本がいっぱい並んでいる。壁に目をやると落合恵子さんの字で設立時のメッセージが。そうか、クレオハウスからの贈り物だ。ここは、2012年12月に市民の寄付金で建てられた市民の診療所で、市民に寄り添って「丁寧に」被曝の検査を行っている。私がこのことを知ったのはまだ建設資金を募り始めたころで、DAYS JAPANの講演会で広河隆一氏や、放射線医療の専門家の話を聴きに行った時だ。「子ども福島（子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク）」の代表として必死で子どもたちの健康を守ろうとしている有機農業の佐藤幸子さん（川俣町）も中心となって「真実を調べ、本当のことを教えてくれる」民間の診療所をつくりたいという思いに深く共感を覚えたのだ。寄付だけはしていたが是非一度訪ねてみたいとの思いが実現した。12月から院長を引き継いだ布施幸彦新院長から診療前の忙しい時間にお話を伺った。



布施院長に診察室で話を聞く

基本的なスタンスとしては、放射線汚染地域には戻るべきではないという考えから「被曝を伴う帰還政策には反対」という立場を取っている。3つの活動が中心である。①甲状腺エコー検査（子どもが主だが、金・土曜日には大人の乳腺エコー検査も） ②被曝労働者の健康相談 ③仮設住宅に住む人へのサポート・健康相談 の3つである。

基本的なスタンスとしては、放射線汚染地域には戻るべきではないという考えから「被曝を伴う帰還政策には反対」という立場を取っている。3つの活動が中心である。①甲状腺エコー検査（子どもが主だが、金・土曜日には大人の乳腺エコー検査も） ②被曝労働者の健康相談 ③仮設住宅に住む人へのサポート・健康相談 の3つである。

<癌の検査>

2000 人弱の子どもたちをエコー検査してきたが今のところは癌の手術まで行った子どもはいない。今は春休みなので県外からも検査を受けに来ている。県外に住む人たちがアクセスできる診療所も欲しい。現在でも国分寺・大阪などいくつかある。甲状腺検査は検査技師も必要だし一日に15

人程度しか診られずコストパフォーマンスが安いので個人医ではとてもできない。ここは松井寛人前院長が超音波専門医なので甲状腺検査指定医院として県の指定を受けているが、福島県立医大の契約病院にはなっておらず、データを送ったりできない関係だそう。「子どもの甲状腺がんは原発事故の影響ではない」と断定する「あの」県立医大とは考え方が違うので色々あるようだ。

< 仮設でも健康相談 >

仮設によっては医療機関と契約しているところもあるが、それのない主に浪江町の仮設に行っている。約 200 人規模。2013 年の 1 月から年間 15 回位 2 年間やって来たが今年の 2 月に、では次はいつにしようかと話したところ、町としては集会所を貸すことはできなくなったと言われた（私はこの話を 3 月 11 日に郡山の集会で聴いてびっくりした）。理由は以下の通りだ。12 月に公安調査庁が「診療所は過激派の拠点になっている」とした文書を福島民友新聞が記事に載せた。それを見て集会所を管理する浪江町がそういう記事が載ったからには貸すわけにいかないと言ったわけだ。抗議はしないのか？との問いに、こちらの言い分もきちんと載せたからとの答え。そんな事にいちいち関わってられないという卓越した感じを受けた。原発問題は政治も絡んでくるので、どんな組織が寄付をしてくれるかなどで〇〇派だ××派の息がかかっているなどと、特にお上の政策と違っていると、批判の対象にされがちだが、広い視野で、「子どもを、人間を、放射能から守る」という一点で、他の立場の違いは超えて協力していかなければならないと思う。

仮設では調子をきき、血圧を測り、マッサージをしたりもする。今までのような何十人規模での相談はできないが、今後は個人宅へ行って数人規模でやるつもりだ。集会所では来られない人來ない人も個別に行けば相談できる。仮設で死ぬ人が続いている現状でここを終の棲家とせざるを得ない人たちを大切にしたいとの話だった。

< 原発労働者の健康 >

帰還させようと強制的に準備を進めているところの問題点は、インフラ整備・役場の整備などのために、まだ線量の高い時期に準備に行かなければならない人たちがたくさんいるということだ。6 号線がオープンしたばかりだが、そのためには高線量を浴びながらその工事をした人たちがいるのだ。被曝を伴う必ずしもやらなくても良い作業には反対ということだ。中間貯蔵施設に汚染物質を運ぶために町村を通る時にも汚染を撒いている。このことは、たらちねの代表の鈴木さんも次のように言っていた。

「6 号線を汚染物質を積んだトラックが 1 分間に 3 台も通るんです。周りの町村に放射能を運んでくる。除染してさえ $50 \mu\text{Sv/h}$ のところ（6 号線）を通ったトラックが子どもたちのいるところに入るんですよ！トラックの線量をチェックする時には『フロントガラスと屋根の上を測れ、タイヤは測るな』と言われてるんですよ」

被曝労働者に健康を害さないように働いてもらわなければ、これからの長い道のりをやっていけない。人出は足りなくなり熟練者はいなくなってしまう。だが、いい加減な管理をしている企業が少なくない。労働者の積算放射線量は毎年 3 月でリセットされる！リセットっておかしくないですか？

【6】放射能測定 各地域のようす

< いわき市→6 号線を北上 >

いわき市を北上し海岸の方を見るとあちこちで護岸工事をしている。時計の針が震災時刻を示していた豊間中学の体育館はすでに無く、校舎もまもなく壊すそう。プールの中に山と積まれていた瓦礫も撤去され、工事車両が忙しく音を立てていた。校舎前の海岸道路は通行止めで、白い塩谷埼灯台・美しい海・フレコンバッグ・工事車両・海水浴の監視台が奇妙な「絵」をつくりだしてい

る。学校の正門まで行かせてもらい写真を撮ると、まだそのままになっている「祝・第40回 東北中学校バレーボール大会出場 いわき市立豊間中学校男子バレー部」の垂れ幕が悲しい。土台だけだったところにかなりたくさん新しい家が建っていて復興を感じさせる。海側は新しい家と昔からのもの（手を入れたのだろうが基本はそのまま）が混在。津波の被害だけだったらこうしてとにかく前に進んでいけるのに・・・。

帰還最前線（！）の広野町からJビレッジ（三年前に来た時はここまでで通行止め）を経て檜葉町に入る。檜葉は山も川も美しく「ふるさと」という感じの私の大好きな風景で、美しいゆえに胸が締め付けられる場所だ。今年はどうなっているのか寶鏡寺の方まで行ってみたかったが時間の関係でほとんど見られなかった。檜葉から富岡町に入るとまもなく線量がグーンと上がった。マスク着用を開始する。ひっくり返っていた車も無くなり、去年までは風雨に晒されて時間が止まっていた富岡駅はきれいに撤去され、代わりにプレハブの白い壁と黒いフレコンバッグがズラ～～～～と並んで海の美しい景観を遮っている。駅の前の商店は黄色いテープが張り巡らされ時間は止まったままだ。町民の誇りだった夜の森の桜並木は除染作業が行われていた。また、この桜並木道路で下水管の埋設をやっている作業員がいて、大変だなあと思った。桜は一本の樹に2～3個可愛い花が開いていた。

いよいよ特別区間に入る。2014年9月15日から一般車両（バイクは不可）が入れるようになったが、窓は開けられず止まってもダメ、ただただ走り抜ける。信号はすべて黄色の点滅。大熊町に入った途端にギューンと線量が上がり、車の中では最高 $5.9 \mu\text{Sv/h}$ にもなった。もちろん最大限の除染が行われての結果であるはずだ。立派な町役場が無人でそびえている。第一原発から約2キロのところを走り、白い3本の排気塔が見えてくる。さすがに緊張する。双葉町に入った途端に今度は線量がガクンと落ちる。この区間の入口も出



いわき市薄磯海岸近くの豊間中学校。左は2012年4月撮影。右は2015年4月。工事車両が出入りし、プールから校庭までがれきの山が大分片付けられている。右の海岸沿いはフレコンバックが続く。



富岡駅跡。海岸沿いにフレコンバックが続く。



夜の森の桜並木。下水管の入れ替え工事をしていった。こんな高線量で帰る人が居るのだろうか？ 路上で $1.5 \mu\text{Sv/h}$ 、雨どい下で $4.3 \mu\text{Sv/h}$ 。



六号線の車内から福島第一原発排気塔を見る

口もゲートのようなものではなく、小さな表示と赤黄青の信号で普通のところに戻ったことが分かる。浪江町を抜け南相馬市原町に初めて入る。「普通の町」に来たという「ホッと感」を感じた。

<飯舘村>

相変わらず美しい田園が広がり里山の原風景そのものだが、中心部に入ると、去年までとは全く違う風景が二つ目についた。一つはそこら中で除染が行われそこら中にフレコンバッグの高くて膨大な山があること。去年は除染を開始したばかりだったので作業しているのは数か所で、フレコンバッグの高さもそこそこだった。もう一つは田畑がベージュ色になっていたことだ。粘着性の強いゼオライトを撒いて放射線を吸着させているのだろう。その土を除去して作物をつくるようになるのだろうか？始め一か所見かけた時には試験的にやっているのかと思ったが、あちこちにある。そして村中で多くの人が埃の舞い上がる中で除染作業をしており、たくさんのクレーン車やショベルカーが忙しく働いている。また、家々の玄関前や庭の中に凄い数のフレコンバッグが積まれている。このベージュの田畑と高く積まれた膨大な数のフレコンバッグが、「帰還するぞ！！」という意思表示に見えた。しかし山の方に行くとは全く手つかずの感じだ。道の両側の林に枯れ草や落ち葉がほとんどなくなっていて近くにフレコンバッグが並んでいて、除染をしたのだと思われるところで測ってみると $2\mu\text{Sv/h}$ もあった。国の政策として 3000 億円（人口 6 千人）かけて除染をして本当に戻って生活ができるようになるのだろうか。とても心配になる。一人に 5 千万円ずつあげて自由に使えた方がよくないだろうか？

飯舘村役場とその隣のいたて活性化センターには多くの村民と車が結集していて、除染や防犯パトロールに出かけていく。隣接する特養老人ホームには震災時からずっとお年寄りが住んでいてケアが続けられていると去年聞いてびっくりしたのだが、現在の様子をきいてみた。去年は 60 名程度だった入居者は現在は 45 名程度。減ったのは他に移ったのではなく亡くなられたそう。訪問者もあまりないとのこと。職員は 63 名ですと若い職員が答えてくれた。

展望広場に向かう途中の赤石沢入口のところは一昨年・去年と、同じ黒いワンちゃんに出会ったところだ。今年はどうだろう？と期待と一抹の不安で車を降りると・・・いた！！ちょっと高くなっている家の前で「わんわん！」と吠えたが、すぐにわかってくれて飛んできた。感激のご対面♡♡♡！！犬が大好きな私の前でお腹を上にして転がってくれた。一緒にいたおじいちゃんは見えないがきっとまだお元気なのだろう。2 年前に初めて通った時も高線量の中で一人と一匹で暮らしているようだった。

<葛尾村・田村市へ>

飯舘村から浪江町に入る展望広場にはゲートが置かれて浪江には相変わらず入れない。峠の展望



12 号線（原町川俣線）沿いの飯舘村公民館前にある石の道路案内図。中心を横に走っているのが 12 号線。その中央が現在位置。
 $1.437\mu\text{Sv/h}$



飯舘村は本格的な除染の只中。行く先々でパワーショベルが動き、フレコンバックが延々と続く。 $0.5\sim 3.0\mu\text{Sv/h}$ がある。除染は道路から 20m までで、山はしない。戻る人も戻らない人も、個々人の選択に応じて国は生活再建の支援をする必要があるのではないかな。

台の手前で $2.8\mu\text{Sv/h}$ あった。昨年は 4.7 あり、そこでとる昼食をセシウム弁当と冗談半分に話していた係の方を思うと、まだ高いとはいえ 6 割に減っていることにほっとする。

葛尾村に行くには大迂回しなければならない。住民にはゲートの数字鍵の番号が知らせてあり、通過できるようにしているようだ。我々は迂回して、逆から反対側の通行止めの地点登館峠まで行く。ゲートの外の道路脇にずらっと並べてあったフレコンバッグは撤去され、線量もだいぶ下がっていた。

峠下の葛尾村役場はこの 4 月から一部の業務をここに戻している。そこの方が次のように話してくれた。「誰も〇〇なら安全と言ってくれない。保証してくれない。山を除染してくれないと帰れないよ。里山が大事なんだ。山と共にあるからいいんだ。山が遠くにあってきれいだねというもんじゃない。山は(生活の) 一部なんだ」

今回の最後の訪問地、都路地区に向かう。去年は全市の避難指示解除の日だった田村市。解除されたばかりの都路地区の高台に「結」という小さな食堂 (closed と書いてあったが) があってその板前だというおじいさんと色々話したが、今は小奇麗なファミリーマートに変身していた。あの時、開校した幼稚園・小中学校が見下ろせる。今はどのくらいの子どもが帰っているのだろうか。田村市ではフレコンバッグを積んだトラックがバンバン通って行った。都路街道に放射線廃棄物の集積所があり、4 月 8 日からは仮置き場に運ぶのだ。ファミリーマートの駐車場での線量は、去年は $0.253\mu\text{Sv/h}$ だったが、今年は 0.143 と約半分まで下がっていた。

家や道路、田畑などの除染が進んでいるが、山は除染されず、帰還だけの政策に疑問を持たざるを得ない 5 年目の福島であった。



国道399号線を葛尾村から田村市に入る掛札峠を南下。阿武隈高地南部を望む。

葛尾村は今年中(2015)に檜葉町と同様に避難指示が解除されようとしているが、矛盾が深い。役場で 0.34 、除染された国道で $0.57\mu\text{Sv/h}$

